

国語科教育

堀江 祐爾

平成27年度における国語科教育研究における表現学関連分野の研究動向についてまとめる。研究動向を最も反映したものとして、全国大学国語教育学会の研究紀要『国語科教育』を取り上げる。そこに掲載された論文の中から、表現学に関連した3編の論文を取り上げ、概要を示すことにする。対象は第77集(平成27年3月31日発行)と第78集(平成27年9月30日発行)である。学会ホームページより論文本文が入手可能である。

<http://www.gakkai.ac/JTSJ/kokugoka/>

【第77集掲載の論文より】

■勘米良祐太(筑波大学大学院)「中学校教授要目改正(明治44年)による文法教科書の変化—作文教育への『附帯』的指導に着目して—」…明治44年中学校教授要目改正により文法教育がどのように変化したのかを、「附帯」的指導という観点から論じ、次のことを明らかにした。文法を作文に対し「附帯」的に指導するときの内容のうち、(1)活用連語については、その扱いが抑制されつつある一方、(2)文の成分については、他の内容より優先して扱われるようになる傾向が見えた。この変化が生まれた原因としては、(1)活用連語内の語の「順序」が、必要な学習内容と見なされなくなったこと、(2)文の成分については、要目改正により大幅な構成の変更が可能となったこと、そしてそれが品詞を「帰納的」に定義する際にも有効だと考えられたこと。

■柴田昌平(東山中学高等学校)「生徒が

動く和歌学習—段階的に認識を広げる学習の実際—」…高等学校1年生を対象とし、単元「3ステップ和歌学習—『古今和歌集』春上を読む—」をまとめた実践論文である。糸井通浩が指摘する、日本語の基本的認識語彙である「かた」と「かたち」、「もの」と「こと」の関係論を応用した和歌学習を試みた。3ステップは次のようなものである。第一段階「かた」の学習—「リズムのかた」「表現のかた」—第二段階「かたち」としての和歌の学習・「こと」としての和歌の学習 第三段階「もの」としての和歌の学習—自分に引きつけて考える—。

【第78集掲載の論文より】

■鈴木貴史(帝京科学大学)「明治初期における書字教育の技能教育化」…欧米の教育課程をモデルとした学制期(1872(明治5)年の「学制」発布以降)の書字教育は、「作文」と「習字」の教育に分離されていたものの、上級の毛筆書字教育では、当時実用的であった書簡文作成を通じて、文章作成と字形運筆の習得、さらに知識の獲得が一体となった教育が展開された。この時期の書字教育について、多くの資料をもとに丹念に考察を展開している。やがて、1900(明治33)年の「小学校令施行規則」において、「習字」は、独立した教科から国語科の一領域である「書^マキ方」とされた。一方の「作文」は、同様に「綴^マり方」として同じ国語科に組み込まれた。この字形運筆を主とする書写と、文章作成を通して書かれた内容を重視する作文の二領域に書字教育を分割する方法が現在まで継承されている。

(兵庫教育大学)